

P-043

医療的ケア児の母親の思い —日常生活のなかで頑張れる力となっていることに焦点を当てて—

中村 安寿¹、宮崎 つた子²¹ 三重県立看護大学看護学部看護学科² 三重県立看護大学

【目的】

医療的ケアを必要とする子どもを育てている家族、主な養育者である母親は様々な困難、課題を抱えていると考えられる。本研究では、医療的ケアを必要とする子どもの母親の頑張れる力や日常生活への思いを明らかにする。

【方法】

医療的ケアを必要とする子どもの母親を対象に、今の生活に対する思いに関する自記式質問紙調査を行った。属性は記述統計、自由記載は類似性で分類し整理した。倫理的配慮は、研究の趣旨、自由意思による参加、プライバシーの保護が保たれること等を文書で説明し、質問紙の回収をもって研究協力への同意とした。また、個人が特定されないよう番号を付し匿名化した。

【結果】

医療的ケア児の母親 14 名から回答が得られた。母親は今の生活に対して、家族の時間や子どもの成長、趣味等に楽しみを感じていた。また、子どもの姿や子どもへの愛情、家族の存在、同じ境遇をもつ者の存在等が母親の頑張れる力となっていた。一方で、77.0%の母親が子育てを越えたケアをする人になっていると思うと回答していた。理由として、医療的ケアがあるから、きょうだいの子育てと違う部分があるから等があった。さらに、医療的ケアに対して否定的な思いはないと回答した者は 62.5%で子育ての一環として捉えている一方で、体力的負担、万年睡眠不足等長期的な家族の負担や預かり先のなさ、周囲からの言葉、視線等の思いも同時に感じていた。

【考察】

母親は子どもの姿や家族、同じ境遇をもつ者の存在等が頑張れる力となっていた。子どもが成長している様子は懸命に生きようとする姿として母親に映り、きょうだいの関わりはきょうだいが医療的ケア児を受け入れ、日々楽しく生活している姿として日々の負担感をやわらげていると考えられる。また、日常生活では体力的負担、睡眠不足、医療的ケアが社会に浸透していないことによる外出時の世間の視線、気遣い等が母親の精神的負担となっていた。このことから、母親は様々な負担を感じながらも在宅での家族全員の生活、子どもの成長に楽しみや喜びを感じ、前向きな気持ちで日常生活を送っていると考えられる。今後小児在宅では、負担への支援に加えて、母親が感じる楽しみ、喜びを大切に共有できる関係づくりが重要であると考えられる。また、母親、家族の一員である夫やきょうだい等も一人一人をみる、それぞれの相互作用をみる関わりは母親の頑張れる力を高め、支える支援につながると考えられる。

P-044

保育所における障害児虐待の発生頻度の推計

堀口 寿広¹、高梨 憲司²、佐藤 彰一³、
曾根 直樹⁴¹ 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所² 千葉市視覚障害者協会³ 國學院大学 法学部⁴ 日本社会福祉事業大学 専門職大学院

【目的】

近年、保育所における職員による児童への虐待等不適切行為が報道されるようになったが、わが国で保育所におけるこの種の行為について集計した公的な資料等はない。養護者による児童虐待では子どもに障害のあることは虐待のリスクを高めることが知られている。保育を利用する障害児の人数は増加していることから、障害児が虐待等を受けている可能性がある。そこで、演者らが調査で得た事案の件数をもとに既存の公的資料等を活用して障害児虐待の発生頻度を推計することを目的とした。

【方法】

全国社会福祉調査にある保育施設数、保育を受けている児童数、全国保育協議会の会員保育所の実態調査報告書に記載されている保育を受けている障害児の1施設当たりの人数のそれぞれについて、調査で事案を収集した時期前後のデータを抽出し、障害児を受け入れている保育施設数とその園での障害児の人数を推計した。つづいて、演者らが市町村の保育担当課を対象にした調査で「障害児が保育所で職員から虐待を受けた」として保護者から相談のあった事案の件数(平成 24-26 年度)を用い、全国の保育所における障害児が虐待を受けた件数、および、その発生率を推計した。本研究の実施にあたり国立精神・神経医療研究センター倫理委員会により倫理審査不要の判断(22-001)を得た。

【結果】

保護者から「障害のある子どもが指導者から虐待を受けた」という苦情が寄せられた自治体は 38 団体と 7 団体あった。各種資料をもとに 2014 年の保育園での虐待発生数は 10 万人あたり 7.7、障害児への虐待の発生数は 1 万人あたり 2.1 と推計した。

【結論】

日本での発生率は諸外国と比較して低いと推定された。